心の栄養剤No121　【心を揺り動かされた「命の授業」】

お笑い芸人・ゴルゴ松本さんの「命の授業」が話題を呼んでいる。

舞台は、群馬県にある赤城少年院。日本で唯一、義務教育中の小学生や中学生たちが収容される少年院だ。

親に育てられた経験がなく親の愛情を知らない少年や、暴力でしか自己表現や感情表現が出来ない少年もいた。

彼らに何を伝えられるか、講話を依頼されたゴルゴさんは悩んだ。

「どんな人間も『自分はダメ』と思う必要はない。チャンスや運はいくらでも転がっている。人生を切り開くのは自分、そのことを伝えたい」と、熱く語った。

「授業」が始まった。舞台袖の赤いカーテンを開けて出ていったゴルゴさんの第一声は、「お～い、来たぞ、みんな！！」だった。

ゴルゴさんは少年たちに尋ねた、「夢のある人?」

「サッカー選手」「億万長者」「社長」・・・、子供たちは思い思いの夢を語った。

「じゃあ、夢をかなえる方法を教えるぞ。よく聞いてくれよ。つらいことがあると、『やってらんね～よ。もうや～めた』『何でオレばっかり』って愚痴こぼすなよな。マイナスの言葉、弱音を吐く。**『吐』は『くちへんにプラスマイナス』**と書く。つまり、いいことも悪いことも口に出していいってことだ。でも夢を実現させる人は、そこから少しづつ変化する。マイナス言葉を吐かず、プラスの言葉だけを言うようになる。**『吐』の漢字からマイナス(－)を消すと『叶』になるだろう。**だから夢が叶うんだ」

ゴルゴさんは漢字が大好きで、漢字の由来を調べては独自の解釈やメッセージを加え、それをノートに書き留めている。

やがて「命」や「炎」などの人文字ギャグが生まれ、それが大ヒットすることでゴルゴさんの知名度は全国区になった。

やがて「授業」を聴く子供たちに変化が起こる。ノートとペンを取り出し、メモを取り始めたのだ。彼らも自分の人生と真剣に向き合おうとしていた。

「紆余曲折でもいい。遠回りしてもいい。危険だとかつらいと思ったときは逃げていい。**『逃』の『しんにょう』を『てへん』に変えたら『挑』になる。一旦逃げて、時間を置いて、また挑戦したらいいんだ」**

さらにゴルゴさんは、命の尊さについてこう説いていく。

「命は『人を一叩き』と書く。叩き続けてくれるもの、それが心臓。『トクン』『トクン』という一叩きの連続、それが命だ」

「命があるのは、みんな一人ひとりに産んでくれたお母さんがいるってこと。お母さんは君たちを命がけで産んだんだぞ。わが子の顔を見る前に産んですぐ命を落とす母親もたくさんいる。そんな営みを人類はずっと繰り返してきたんだ。今度はみんなが命をつなげていく番。みんな、ここでがんばって勉強して、外に出たら思いっきり命を輝かせていくんだぞ」

ゴルゴさんが初めて少年院で「授業」をしたのは２０１１年１１月。１５０名の少年たちを前に熱く語り、気付くと予定を３０分もオーバーしていた。

「オレはこれをボランティアでやる。これは大人の責任だ」と使命感に目覚めた。以来、ゴルゴさんは仕事の合間に自分で車を運転し、東京近郊の少年院十数か所で「命の授業」を行うようになった。

「身の回りにヒントがたくさんある。きっかけ一つ、考え方一つ、見方一つだということに気付いてほしい」と、ゴルゴさん。

お笑い芸人の道は甘くない。今日を耐えながら見えない明日に希望を見出し、自分を信じ奮い立たせ、ギリギリの状態の中でも夢を追い続けた一握りの人たちが、やっと成功の光を掴むことができる厳しい世界だ。

ゴルゴさんが少年たちに見せたのは、信念を持って生きる姿、夢に向かって迷いなく走る姿だった。

「何度でもやり直せる」「苦しいことがあるから人は成長できる」、彼自身もそんな言葉に支えられながらやってきたからこそ、その言葉に少年たちの心を打つ力があるのだと思う。

お客様の〝苦しみ〟〝辛さ〟〝心身共の痛み〟など数多くの悩みをお聞きする事が私の大切な仕事になります。

「どう少しでも笑顔になってもらえるか」
「どう少しでも前向きになってもらえるか」
「そして元気を取り戻してもらえるか」

いつもそんな事を考えながら、言葉を大切に選びながらお話させて頂いています。
ゴルゴさんの話は、テレビで何回かお聞きした事がありますが、私もゴルゴさんに負けないよう**もっともっと真剣に一期一会の気持ちを持って**取り組まなくては・・・

PS
私も言葉には確かに**「言霊」**と言われるように魂があると思っていてその中で一番意識している言葉は**「ありがとう」**です。毎日誰よりも多くの**「ありがとう」**を発するよう心掛けています。自分で勝手にその事を**「ありがとう健康法」**と名付けています!!是非おすすめです!!

